

オッドアイの少年と紫 の少女

kakuya

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版ソードアート・オンラインオーデイナル・スケールの放映を記念(?)して、書いていこうと思いました。まあ、前作品のネタが尽きたのでとりあえず、ネタを思いつくまでこつちをちよくちよく書いていこうかと…

この物語は、主人公のカクヤとユウキ、その仲間達のSAOでの物語である(ALOやGGO編等も書いていきます)

目次

一応(?) キャラ紹介と、その他諸々

1

1 話目 【全てが始まったあの日の現実

世界の出来事】 4

2 話目 【ログアウト不可能の世界】

8

3 話目 【決意】 17

4 話目 【第1層ボス攻略会議】 22

第5話 【ボス戦の前日】 28

6 話 【ボス戦】 38

7 話 【ビーター(裏切り者)】 45

第8話 【ユニークスキル】 51

一応(?) キャラ紹介と、その他諸々

どうも、k a k u y aです。前の小説のネタが尽きてしまい、SAOに逃げ込んでしまいました…

とりあえず気分転換(?)に新しい小説を書くことに致しました。新学期が始まりましたが何せ受験生なのでこれから勉強しろと親に言われておりますので全くこのサイトに来られませんでした。いざ書こう!と、すると、ネタが尽きてしまっている次第です。なので今年放映された(前々から好きだった)劇場版ソードアート・オンラインの放映を記念(?)してこちらの小説を書いていこうかと思っております。ネタを思いつき次第、罪を背負った者の幻想入りも、進めていこうと思っております。これからもよろしく願います。

・キャラ紹介

この小説の主人公

本名・藤田覚也(何となく一般的?な、名前にしようとしたのと、自分の下の名前を入れた結果ww)

キャラネーム・カクヤ(まあ、ひねり用が無いっすねw)

歳・14歳ゲームクリア時には16歳

体質・動体視力と、動物的な勘(?)が他人よりとても高い。左目が薄い青色をしている(オッドアイ)ちなみに右目は焦げ茶色

特技・相手をバカにしてイラつかせ挑発し、ミスを誘発させる事(簡単にいえばウザイ)

趣味・釣り、昼寝

性格・ひねくれている、ように思われているが実は仲間思いのいい奴。

得意武器・基本的に片手剣を用いているが、本人は「もっとリーチが欲しい」との事。一人称は俺。

この小説のメインヒロイン

本名・紺野木綿季

キャラネーム・ユウキ

歳・13歳ゲームクリア時15歳(とさせていただきます)

使用武器・片手剣

→性格などはご存知の方が多いと思いますので省かせていただきます。

この小説では、アインクラッド75層でのクリアとしようと思っております。

と、キャラ紹介はここら辺にして…

・この小説について

まずはSAO編から、そしてALO編、GGO編と、本編の物語に沿って書いていこうと思っております。オリキャラなどは主人公の他には考えてはおりません。皆さんからのご要望などがあれば考えていこうと思えます。

・今後の方針について

とりあえずはネタが尽きるまでは続けて書いていこうかと思っております。ただ、他に連載中(笑)の罪を背負った者の幻想入りの方も、ネタが思いつき次第、交互に投稿していくと思うので、亀投稿になると思いますが、ご了承くださいm(。|。*)m
 自分の作品とはいえ、他作品のを持ってきてすみませんm(。|。*)m
 今後とも、宜しく願います。

1話目 【全てが始まったあの日の現実世界の出来事】

覚也「……っしやああああああ!!遂にこの日がきたアアアアアアアア!」

そう、今日は正規版のSAOが発売される日なのだ…意気揚々とゲームをプレイし始めたこの日から、すべてが変わってしまおうと知らずに……

覚也「うっし!早速やりたいところなんだが、ゲームをプレイ出来るようになるがまだ1時間ちよい待たなきゃならんのだよなあ」

1人、部屋の中で肩を落とす。

(あのクソ親父が茅場さんと一緒に作ってたゲームらしいしな)

ピンポン

突然家のインターホンがなった

覚也「ん?誰だ?」

階段を降り、玄関に向かう

ガチャ

玄関のドアを開けると、そこには(一方的にだが)知っている人物が立っていた
覚也「…あえ?な、なんで…あなたがここに?」

?「……やはり、似ているな」

覚也「いや、似ているかは置いて、何故あなたがここにいますか?【茅場】さん」

茅場「βテストはどうだったかね?」

そう、この男こそがあの事件の犯人たる茅場晶彦なのだ、この時の俺は知る由もないが…

覚也「βテストですかあ、まあ、楽しかったです。でも、あの雨の多さは酷かったですけどね」

2人は苦笑する。

茅場「…その節はすまなかった」

覚也「何がです?」

茅場「…君のお父さんの事だ…」

覚也「あゝ、あのクソ親父つか、大丈夫ですよ。それに、クソ親父が残していったSAOが出来るんですから」

ニツと笑ってみせる覚也

茅場「…そうか、ならば、ゲームをしつかり楽しんでくれたまえ」

覚也「はいっ!…それではもうすぐなので、これで失礼させていただきます。」

茅場「ああ、私も最終調整しなければな、ではまた…」

キイイ

覚也は、別れの挨拶をすませ、ドアを閉めた。

ドアが締まりきる直前、

『これは、ゲームであって、遊びでは無い。』

という、茅場の声が聞こえた

覚也「…んん？」

(どういう意味だ？ 確か雑誌にも書いてあったような…)

不思議に思ったが、気には止めなかった…

それから一時間ほどすぎ…

覚也「さてと、そろそろかな？」

覚也は、濃紺のヘッドギア「ナーヴギア」を頭に装着し、中に表示されている時刻表を見た表示には

12:59と表示されている

そして…

13:00に変わった瞬間に、VRの世界に飛び込むコマンドを唱えた

覚也「リンクスタート！」

体の五感が遠ざかり、色々な色の線が後ろへと流れてゆき、ロックが解除されていき、国、地域の選択（勿論日本）を行い、 β テスト時のデータを引き継ぐかの選択も行い（勿論 yes）キャラネームを「kakuya」（カクヤ）と打った：

To be continue.

2話目【ログアウト不可能の世界】

カクヤ「ん…」

カクヤは閉じていた目を開く。

そこには見慣れた光景が広がっていた…

幾度となくβテストで見ていた光景を…

カクヤ「っし、まずは武器買うか」

カクヤは、街の中にはいつていき、走って武器屋を目指す。あとちよつとで武器屋に着くと言うところで、物陰から飛び出してきた少女にぶつかってしまった

？「わひやあ!？」

カクヤ「うおわあ!？」

ドンッ!

思いつきりぶつかったため、少女は尻餅をついてしまう

カクヤ「…つつう、あ!君、大丈夫!？」

？「イタタ、あ、うん!大丈夫だよ!ごめんね、急に飛び出したりして…」

カクヤ「いやいや、走っていた俺も悪いよ、ごめん」

と、謝りながら手を差し出す。

？「お互い様だね、あははは！」

少女は笑いながらカクヤの手を取り、起き上がった

？「ボクはユウキ！ヨロシクね！」

おいおい、知らんヤツにキヤラネームとはいえ、名前を教えちゃいかんだろてか、アホ毛可愛いなおい！それにボクっ娘かよ…と思いつながら

カクヤ「あ、ああ、よろしくな俺はカクヤだ」

ユウキ「タクヤ？」

カクヤ「いや、カクヤだって、カ・ク・ヤ」

ユウキ「あ！ごめーん、つてことで改めてよろしく！カクヤ」

カクヤ「おう！よろしくな、ユウキ」

カクヤ「さて、武器を買うかなあ」

ユウキ「その前に…カクヤってβテスト？」

カクヤ「…へ？」

ユウキ「いや、だからさ、カクヤはβテストなの？」

カクヤ「…な、なんで分かったんだ…？」

ユウキ「うーん、走り方で何となく…」

(ほお、すごい子が居たもんだなあ)

カクヤ「とりあえず察しの通り、俺はβテスターだよ」

ユウキ「やつぱり！なら、ボクに：

SAOの基本をレクチャーして！」

カクヤ「いや、まあ、別にいいけど、あーつと、うん、とりあえず武器屋行くぞ」

言うやいなやカクヤは武器屋に歩き始めた

ユウキ「あ、待ってよ〜！」

ユウキも急いであとを追う

カクヤ「さーてと、とりあえずいつもどーり片手剣で逝くか」

ユウキ「なんか漢字違う気がする」「気のせいだろ」絶対気のせいじゃないからね!？」

カクヤ「まあまあ、とりあえずユウキの武器は決まったのか？」

ユウキ「あ、うん、ボクも片手剣にしたよ」

カクヤ「ん、りよーかい、とりあえずスキルスロットに片手剣スキル入れるか」

そう言うと、カクヤは、右手の人差し指と中指を揃えて縦に振る、すると、ウィンド

ウが表れる、それを操作しながら

カクヤ「ほら、ユウキもスキルスロットに片手剣スキルいれるよ」

ユウキ「あ、うん！分かった！」

カクヤ「さてと、そろそろ街の外にでるか」

街の外、通称【圏外】は、モンスターが湧き、モンスターの攻撃を受けるとHPが減るのだ。逆に【圏内】は、完全にHPを保護し、攻撃を受けたとしても1ミリもHPは減らないのだ

少年少女移動中

カクヤ side

カクヤ「さて、まずは、あのイノシシを倒すか」

目の前に湧いたイノシシ正式名称はフレンジア・ボアー

まあ、見た目が完全にイノシシなので皆イノシシと呼ぶが…

カクヤ「あ、ユウキ、まずソードスキルの使い方は分かるか…？」

ユウキ「……えつと〜」

カクヤ「あー、そうか、ならまずは手本…つっても感覚だからなあ…」

そう呟きながら背中の中のを抜き、突進のモーションにはいつているイノシシを見つめる

カクヤ「…スウー…」

息を吸い…止める

イノシシが走り始めると同時にこちらにも走り始める

イノシシの頭の後ろ、首の辺りを狙ってソードスキルを放つ

片手剣基本垂直斬り「バーチカル」

システムアシストによって自動的に動く手足を動きに逆らわないように意図的に加速させ、威力をブーストとさせる

この技を会得するのに始まりの街で10日ほどある奴と練習しまくったからなあ：

カクヤはそう考えながらイノシシの弱点に攻撃をヒットさせ、先程までイノシシだったポリゴンの破片を受けながら剣を鞘に落とす。

カクヤ「……とまあ、こんなもんだよ」

ユウキ「いや分かんないよ!？」

返す言葉もございません

そんなことを考えながらユウキのツツコミに対して言葉を返す

カクヤ「いやあ、そんなことを言われてもなあ感覚だしなあ、なんて言ったらいいかな?……あ、そうだ、ちよつと失礼」

カクヤは新しくHOPしたイノシシとユウキを交互に見て何か思いついたように言うやいなや

ユウキの後ろに回り込んだ

ユウキ「ちよつ、ちよつとカクヤ!？」

カクヤ「いいからいいから、とりあえず剣を抜いてみ？」

ユウキ「むう」

ブツブツ何か言っているみたいだがなんだ？

とカクヤは思いながらユウキの剣を持っている手を掴み、バーチカルの発動モーシヨンをとらせる

ユウキ「ふえ!?!／／／／」

カクヤ「ほら、右手ももう少し上、剣も一緒に上げて」

ユウキ「くくくつ／／／／」

カクヤ「そうそう、そんな感じ、ってユウキ?どうした?顔赤いぞ?」

ユウキ「な、何でもない!／／／／」

カクヤ「??」

カクヤside END

ユウキside

うう／／／／、恥ずかしいよお／／／：で、でもわざとじゃないんだよな

初日にこれじゃあ先が思いやられるなあ：うう：

よ、よしっ!一応ソードスキルの発動方法も分かったしあのイノシシを倒そう!って

あれ?なんだこれ?

ユウキ side END

カクヤ side

うーむ、なんでユウキの顔が赤くなったんだ？それに焦ってたみたいだし…ま、いいか「ねえ、カクヤ」

カクヤ「ん？どうした？」

ユウキ「このハラスメント防止コード？って、何？」

カクヤ「What?今なんて言った？」

ユウキ「え？だからこのハラスメント防止コードって何？」

カクヤ「へえあ!?ユ、ユ、ユウキ!?何も押してないよな!?どっちも押してないよな!」

ユウキ「え？あ、う、うん…「よ、良かったあ〜」ど、どうしたの？」

カクヤ「えっと……」

カクヤがハラスメント防止コードの説明を終えると

ユウキ「えーと、とりあえず本当はさつきカクヤが言った過程であったのに、その過程通りじゃなく、飛ばしでボクにウインドウが表示されたってこと？」

カクヤ「ああ、そうだと、思う…なんでだろう？直前になって仕様が変更されたのか

…?」

ユウキ「おーい」

カクヤ「いや、でもなあ、普通は配信する直前に変えるかあ？」

ユウキ「おいってば！」

カクヤ「あえ!? あ、すまんすまん考えにふけてた」

ユウキ「むう、とりあえずバツを押せばいいんだね？」

カクヤ「あ、ああ、そうだ頼む」

ユウキ「あ、ごめん、間違えて○押しちゃった」

カクヤ「はっ!? え!? ちよっ!」

ユウキ「あはははは! うっそピヨーン」

カクヤ「……はふうあー、よ、よかったア…」

ユウキ「あははは! あ、そろそろログアウトしようかな？」

カクヤ「あー、確かにそんな時間だな、あ、フレンド登録しようぜ」

ユウキ「え？」

カクヤ「ここで会ったのも何かの縁だしな」

ユウキ「うん!」

俺はユウキにフレンド申請を送る

ユウキ「ありがとう! 今日楽しかったよ! ばいばーい!」

カクヤ「おう! じゃーな」

ユウキはウインドウを開き、ログアウトボタンを押そうとした、いや、実際に押した筈だった。消えるはずのボタンが消えない。そしてユウキが俺の方を見て言った一言に俺は戦慄した…

『ログアウトボタンが…無いよ…？』

3 話目 【決意】

カクヤ「はあ？ユウキ、何言ってるんだ？」

そう言いながらウインドウを開く

カクヤ「ログアウトボタンならここにある、だ、ろ…？」

カクヤは、ログアウトボタンにしっかり触れた、いや、触れたはずだった…ログアウトボタンを見ると、本来そこにあるべきログアウトボタンは存在しなかったカクヤはユウキに言葉をかけようとした瞬間に目の前が光に覆われた…その瞬間自分に何が起こったか分かった。このエフェクトはシステムによってある特定の位置に転移させられる時のエフェクトだった。そして、今強制的に転移させられる理由はただ一つ…

【ログアウトボタンの消失】についてのGMの説明だろう…早いな…と思いつつ、転移が完了する約1秒でそこまでの思考を完了する。まず、ユウキを見つけなければ…と思いい、動こうとした瞬間出会った時に見たあのアホ毛が目に入った。

ふう、と心の中で安堵しながら、ユウキの近くまで行き、小声で声をかける

カクヤ「ユウキ」ボソツ

ユウキ「っ!? ああ、カクヤかあ」

ビクツとして振り向いたユウキは一瞬安堵の表情を浮かべたが、焦りと不安の入り交じった顔になる

ユウキ「ねえ、これから何が起ころの？」

カクヤは、ユウキを落ち着かせるために優しく答えた

カクヤ「多分ログアウトボタンが無い不具合のお詫びと修正を行う為に運営が集めたんだろ」

ユウキ「ふう、良かったあゝ」

ユウキは今度こそ安心したように胸をなで下ろす

あれ？そんな胸な「何か失礼なこと考えなかつた？」

エスパ―か何かかよ…

そんな緊張感のないコント(?)の様なことを続けていると、頭上が赤く染まった。いや、染まった、という表現は合っているが正確にはシステムアウンス、という赤い文字と枠で覆われている

と、その時

空中に血が流れ出すように赤いローブマントを被った人が出てきた…いや、人というには大き過ぎる。なんだ？イベントでも始める気かよ…？と思いつながらローブマントの人物がじゃべるのを待つ…

本当のSAOのチュートリアルを聞き終わった俺は放心していた…そして、あの一言「これはゲームであって遊びではない」を頭の中で繰り返し返していた。

何故だ？なんで？そんな考えが何度も何度も頭に浮かぶそして、HPがゼロになり、自分がポリゴンの破片と化し、消滅する様を何度も何度も想像する

怖い

怖い怖い怖い怖い

怖い！

カクヤが恐怖に押しつぶされそうになっていたその時…

？「…カクヤ？」

カクヤ「…え？ユ、ユウキ？」

ユウキ「…ねえ、さっき言ってたこと…本当？」

カクヤ「…わからない…くっ、だけど、多分今の状況からすると…本当、なんだと思う…」

ユウキ「つつっ！！」

カクヤ「俺は、次の街に行く…」

ユウキ「…え？だ、駄目だよ！危険すぎるよ！」

カクヤ「強くなるには次の街の方が都合がいい」

ユウキ「……」

カクヤ「ユウキは、ユウキはどうするんだ？」

ユウキ「…ボクも…ボクも一緒に行く！」

カクヤ「分かった」

カクヤはそう言うと、ウィンドウを出現させ、操作し始める。

カクヤが指を止めると同時にユウキの前に

k a k u y a が Y u u k i を パ ー テ イ に 誘 っ て い ま す

パ ー テ イ に な り ま す か ？

Y e s

N o

のウィンドウが現れる

ユウキは少し迷ったが、Y e s を 選 択 し た

カクヤ「よろしくな、ユウキ」

ユウキ「うん、よろしく！」

カクヤ「とりあえず森に入るまでのイノシシは無視だ」

ユウキ「分かった」
カクヤ「よし、行くか！」

4 話目【第1層ボス攻略会議】

ここは迷宮区タワー前の街

トールバーナ

あのチュートリアル

いや、あのデスゲームが始まった時から

1ヶ月が経った…しかし、まだフロアボスのボス部屋は見つかっていない…βデスタターの俺でさえ見つけられていない

そして今日、第1層ボス攻略会議が始まろうとしていた

？「はい、それじゃあそろそろ始めさせてもらいます！」

真ん中に立っている人物が手を叩きながら集まった人達に呼びかける

？「今日は俺の呼びかけに集まってくれてありがとう！俺の名前はディアベル。職業は気分的にナイトやってます！」

あはははは！そんな職業無いだろー！いいぞー！

などなど、ここにいる者たちの心を掴んでいく

凄いな…少し喋っただけでここまで人の心を掴んでいつてる…

カクヤはそう考えながら続きを聞いた

ディアベル「今日、俺のパーティがこのフロアの最上階にあるボス部屋を発見した！」
ざわめき、拍手がおこる。中には指笛を鳴らしているものもいる

ディアベル「オツケー、それじゃ早速だけどもまず6人のパーティを組んでみてくれ
なにい!？」

そう思いながら周りを見渡すと既にパーティが出来つつある…と、ふと少し離れた所の2人組がいた

カクヤは違和感を覚える

アイツ：多分βテスターだ…あのウィンドウの操作の仕方多分フードの奴の前に出たウィンドウはパーティ登録の分だろう…あの黒髪の奴は…

カクヤはここまで考えながらその2人組に近づいていく

？「アンタらも、あぶれたのか？」

カクヤ「ん、ま、そんなもんかな？」

多分だが、奴も気づいただろう、俺もβテスターであると

？「どうする？パーティ組むか？今回限りだが」

カクヤ「ユウキはどうする？俺はそうしたいけどな」

と、ここまで黙っていた相棒に話しかける

ユウキ「ん〜」

と唸りながら向日葵のような笑顔を浮かべ

ユウキ「…カクヤに任せるよ！」

？「…カクヤ…？」

あ、ヤベ、気づかれたか？アイツ以外とはあんま関わらないようにしたんだがな

？「マジでカクヤか？」

カクヤ「…え〜つと、まあ、そうだけど…あんたは？」

その質問を受けた黒髪の剣士は片頬をニヤリとさせた

軽い既視感…

こいつの笑い方は!!

カクヤ「もしかしなくても…キリト…か？」

キリト「ああ」

俺は瞬時に目を周りに走らせる

βテストがいると分かればすぐに周りのヤツらは俺たちを攻略から外すだろう

キリトもそれに気づいたのか、少しボリユームを下げて喋りかけてくる

キリト「とりあえず、パーティを組もう、話はそれからだ」

俺は頷き、キリトから送られてきたパーティ参加のウィンドウを操作し、キリトの

パーティーに加わる

ディアベル「よし、そろそろ組み終わったかな？そりじやあ」

？「ちよお、待つてんか!!」

ディアベルが喋ろうとしたときに誰かが声を挟む

声を挟んだ人はよっ、ほっ、と、声を出しながら俺達が座っている椅子(?)を一段ジャンプしながら降りてゆく

ディアベルが居る一番下の所まで行くと、この場にいる全員に向けて言った

？「わいはキバオウつてもんや」

いや知るか!という俺の心の中のツツコミはみんなも同様だっただろう…

キバオウ「ボスと戦う前に言わせて貰いたいことがあるんや!こん中に、今まで死んでいった2000人に、詫びれなアカンやつおるはずや!!」

と言いながらこの場に居るものを指さす

このとき、俺は苦虫を噛んだような顔をしていただろう…

ディアベル「キバオウさん、あなたの言う謝らなければいけない人達というのは、元βテストーのことかい？」

キバオウ「決まつとるやないかい!ペーター上がり共は、こんくそゲームが始まったその日に、ビギナーを見捨てて消えよつた!あいつらはうまい狩場やボロいクエスト独

り占めして、自分らだけポンポン強なって、ワイらのことは知らんぷりや…こん中にもおるはずやでえべーター上がり奴らが！」

：「はあ？何いってんの？このとんがり頭、確かに俺達が先先突っ走って、見捨てたこととは否定しねえが、その2000人の中にもあんたの言うべーター上がりも居るんだぞ？」

「そう思いながら続きを聞く」

キバオウ「そいつらに土下座さして！溜め込んだ金やアイテムを全部吐き出してもらわなパーティーメンバーとして命預けれんし、預かれん！」

別に頼んでねえよ！てか、今の発言俺達の見捨てるよりもヒデエよ!?

「そう思ったその時」

「？」「発言いいか？」

その声が聞こえた方を見ると、軽くてを挙げた黒い肌をした巨漢の男が手を挙げている

「？」「俺の名はエギルだ、キバオウさん、アンタの言いたい事つてのはつまり、βテストターがビギナーを見捨てたせいで大勢が死んだ、その事を謝罪した上で賠償しろ、という事か？」

キバオウ「そ、そや！」

エギルは無言で本を取り出す

エギル「これは、街の道具屋で無料配布されている攻略本だ、あんたも貰ったよな？」
キバオウ「ああ、それがどうしたんや？」

エギル「これを配布していたのは元βテスターだ」

このエギルの発言に周囲がざわめく

エギル「情報はあつたんだ、なのにあれだけの数が死んだ、ここではそれを踏まえて話し合うと思っただがな」

キバオウはフンツと鼻を鳴らして、椅子に座る

エギルも自分が座っていた所に戻る

そこからはディアベルが、俺達βテスターのが知っているボスの基本情報、使用武器やソードスキル、取り巻きなどを攻略本を使って説明し終わった

第5話【ボス戦の前日】

ボス会議が終了し、各々が解散していく

カクヤ「んー、この後どうするよ？」

ユウキ「ボクはとりあえず休みたいかなあ」

キリト「それじゃあ、俺んとこの宿に來いよ。アンタもそれでいいだろ？」

後半はアスナの事だろう。

アスナは黙ったまま頷いた。

カクヤは、その道中であることに気づいた

カクヤ「テメエか、あの宿先取りしやがったのは」

キリト「あー、まあな」

カクヤ「あそこなあ、風呂付きn」「ホ、ホントっ!？」はい、そうです」

まあ、あんまり期待しない方が…ボソボソと付け加えながら頷く

カクヤ「せっかくだし、風呂貸させてもらってもいいか？」

キリト「別にいいぞ」

ユウキ「やったー!!」

ユウキは飛び跳ねながら喜びを全身で表現している。

可愛ええのお、てか、アスナも小さくガッツポーズしてんじやん

カクヤ「そうと決まりやあ、早速移動すつかね？」

ユウキ「そうだね！早く行こう！」

おつふるおつふろと眩き、スキップしているユウキ

そんなに楽しみなのかよ、と心の中で眩きつつキリトたちと移動を開始する。

—キリトの宿にて—

カクヤ「で、何故こうなった」

キリト「言うな…」

カクヤ「提案者って俺だったよな？」

キリト「ああ」

カクヤ「宿主ってか、この部屋借りてんのお前だよな？」

キリト「ああ」

カクヤ「なんで俺達が後なんでせう？」

キリト「知るか」

女の子2人は絶賛入浴中

俺たち言い出しつぺと、借主が何故か後から入らなければならぬ…何故だ？

そう考えている途中でドアがガチャツと開いた

ユウキ「…」

カクヤ「おー、ユウキ。風呂どうだった？」

ニヤニヤしながら聞いてみる

ユウキ「どうもこうもないよ！あれはお風呂じゃないじゃん！カクヤもキリトもあれをお風呂だつて言うの!？」

カクヤ「プツククク、はい。あれはここ（VR）ではお風呂です。ヤベエクツソおもれえ」

ギヤハハハハハと、1人で大笑いしていると

ガチャツとまたドアが開いた

アスナ「…」

カクヤ「おー、アスナ。クク：風呂どうだった」

アスナは口を開かずにレイピアの柄に手を伸ばす

あれ、キリトどこいった？

不思議に思っていると後ろでも同様に剣の柄を握る気配

あ、これ死んだわ

抜刀と同時に2人のソードスキルが俺に炸裂した

カクヤ「チーン

ユウキ「まったく」

キリト「ガタガタガタ

ユウキはカクヤを放置したままキリトの方を向く

キリト「ヒッ!」

ユウキ「キリトも共犯者なのかなあー?」

アスナ「…」

ユウキとアスナは剣を握りしめながら殺気という名のオーラを出す

キリト「い、いやいや、俺はなにも知らねえよ!?!決してナーヴギアが水の生成が不得

意とか知らねえよ?…あ…」

この少年、自分で墓穴を掘った

そして本日2度目のソードスキルが炸裂した

気絶状態から回復した2人は絶賛土下座モードに以降したのは言うまでもない

カクヤ「…で、どうすんだあ?」

キリト「何がだよ?」

カクヤ「何がって、そりゃあ、戦闘の時の配置だよ」

キリト「ああ、でも、このビルドのメンバーじゃあなあ」

カクヤ「…あはは、はあ、盾持ち俺だけだしなあ、つってもタンクじゃねーし、ダメー
ジディーラーが多いな」

キリト「相変わらず変な戦い方すんのか…」

カクヤ「ほっとけ」

キリト「まあ、主力のこぼれを狩るだけだからなあ」

カクヤ「んー、じゃあ、2人1組でやるか、俺とキリトが別れという危ない所があつ
たら援護し合うつーことで」

キリト「それがいいだろ、βテスト時と同じなら簡単に終わるはずだ同じなら、な」

キリトも同じ考えに辿り着いたのだろう

少し表情が険しくなる

ユウキ「決まったー?」

カクヤ「決まったー? って、話聞いとけよ…まあ、とりあえず2人1組で行動だな、
どっちかが危なくなったらそれぞれ援護に向かうつてとこだな」

ユウキ「りようかい」

カクヤ「さーてと、そろそろ宿に戻りますかねえ」

キリト「そうした方がいいだろうな、明日はボス戦だし」

カクヤ「そーだな、ほんじやまー明日なー」

軽く手を振りながら宿までの道のりをユウキと歩きたまにすれ違う輩がユウキを見てから俺を睨むんだが…何故だ？

そんなこんなで晩飯を食いながら俺の借りている部屋でユウキと話している

カクヤ「そろそろ休んだ方がいいだろ、運動で疲れることはないけど精神的に来るか
らな、ユウキも早めに休めよ」

と言いつつ武装解除し簡素なシャツとズボン姿になりベッドに横になろうとする
ギユツ

カクヤ「…え？」

なんか背中に柔らかい感触がー！いかん！考えるな！

……震えてる？

カクヤ「…どうしたんだ？」

ユウキ「…い」

カクヤ「ん？」

ユウキ「…怖い」

ギユウウウウと力を込めて抱きついてくる

なにが？とは聞けなかった…震えているから

代わりに…

ギユツ

と、抱擁した。

優しく、頭を撫でながら、安心させるように

フツと薄い笑みを浮かべながら

カクヤ「…俺も怖いよ、けど、俺は退く気はないし、逃げるつもりもない…ユウキは逃げたいのか？」

ユウキ「…うん」

いつもの元気いっぱいなユウキからは考えられないほど小さな声だ…

カクヤ「そっか…なら」

これを言う覚悟、決意…凄く重いが構わねえ…

カクヤ「…俺が」

これから、失うわけにはいかない

カクヤ「…お前を」

カクヤ「守ってやる」

ユウキ「……うん」

カクヤ「お前を絶対に元いた場所に帰してやる。だから……安心してくれ」

ユウキ「……うん」

そう言つて抱擁を解いてやる

カクヤ「さて、部屋に戻つて休めよ」「やだ」へ？」

ユウキ「1人は、やだ」

……こいつなんていいやがりましたか？

カクヤ「ソレハワタクシメニイツシヨニネロト？」

ユウキ「うん」

カクヤ「ダメに決m「……グスツ」……分かりましたよ……」

もおどーにでもなれクソツタレえ

ユウキ「……それはそうとこのハラスメント防止コードって何？」

カクヤ「ホワツツ!？」

ユウキ「だからこのハラスム」それは分かったからバツを押ししてください!!」わ、分かったって」

ピッ

という音と共にウインドウが消える

フウーと、安堵の息を吐く

ユウキ「で、さっきのは一体何なの？」

カクヤ「あー、えーつと、簡単に言えば痴漢みたいなもんに対する措置だな」

ユウキ「痴漢って…あれが!？」

カクヤ「正確には不適切行為ってやつかな、でも発動条件が変わってんな…なんでだ

?」

ユウキ「…因みに丸を押ししたらどうなるの？」

カクヤ「牢屋にビューン」

ユウキ「うわぁ」

カクヤ「てなわけでお一人d「やだよ?」話聞いてましたかあ!？」

ユウキ「だって怖いもん」

カクヤ「もんじゃねえよ」

結局カクヤが折れて添い寝するのだった余談だがカクヤもユウキもベッドに入った

瞬間爆睡したのだった

6話【ボス戦】

グオオオオ!!

第1層迷宮区内ボス部屋で響くボスの雄叫び

それを聞き流しながらボスの取り巻きの振り下ろした武器を自分の盾で受け流す同時に横に飛び退く

カクヤ「ユウキ!スイッチ!!」

その声と同時に、ユウキは瞬時に相手との距離をつめる

ユウキ「いくよっ!!」

まだ子供っぽさの残る…しかし、気合いの入っている声と同時にキーンというソードスキルが発動する独特な音がユウキの持つ剣から発せられる

ユウキ「はあッ!!」

ユウキが剣を振り下ろす

剣は敵を、胴からやすやすと切り裂く

敵は光の粒子とともに碎け散る

キリト達は……まあ、大丈夫だろう。

カクヤはそう考えながらチラリとキリト達の方へ視線を向ける。

キリト「スイツチ！」

すかさず、アスナが細剣ソードスキル「リニア」でとどめを刺す

ヒユウ、と小さく口笛を吹いて新たにホップした自分の獲物に視線を向ける

カクヤ「ここまでは今まで通り……か……」

(何も無ければいいが……)

ユウキ「やあつ！……あれ？カクヤ、どうしたの？」

敵を倒したユウキが不思議そうにこちらに視線を向ける

カクヤ「いや、なんでもない。さー、次だ次！」

ユウキ「おー!!」

結構な時間が経っただろうか……ボスのHPバーも残り1本。それにレッドの危険域まで達している。ここからボスの攻撃パターンが変わるため、皆が気を引き締めている。

その時、ディアベルがボスに突撃していった。

第1層のボス、「イルフアング・ザ・コボルドロード」は、HPバーが残り1本となる
と、武器を変更し、攻撃パターンも変化する。

カクヤ「なっ!？」

(あれは野太刀!βテスト時と……違う!!)

キリトもそれに気がついたのだろう、みんなに「下がれ!」と叫んだ。

ディアベルもそれには気が付いただろう、しかし、ソードスキルを発動してしまつて
いるため後退することは出来ない。そこへ、ボスが雄叫びをあげながらソードスキルを
放つ……

ソードスキルをもらに受けたナイトの体は易々と吹き飛ばされた。慌ててキリトが
駆け寄り、ポジションを渡そうとする。その間にも他の攻略組の面々は混乱に陥つてし
まった。

カクヤ「くそっ!!」

最悪の予想が的中してしまったことへの悪態をつきながらみんなへ指示を出す。

カクヤ「装備が軽いアタッカーは下がれっ!タンクは前に!ボスの武器は攻撃範囲が
広いからなるべく距離をとれ!範囲攻撃もあるがその時のタイミングで叫ぶから必死
に回避しろ!」

そう叫ぶ……だがこの間にも思考は止めない。考え続ける。剣を握り、盾でボスの攻

撃を防ぎながら

カクヤ「タンクはパリイ出来たらアタツカーとスイッチ！アタツカーは単発のソードスキルで構わない。一撃離脱だ！アタツカーの攻撃の瞬間にタンクは回復しろ！」

(キリト……まだか？……さすがに俺一人じゃ……)

カクヤは、それほど重装備ではない。と言うより、革装備だ。それほどタンクのように耐えられるものではない。

キリト「カクヤ！」

キリトの声が聞こえた瞬間

カクヤ「オオアツ！」

短く吠え、ボスが振り下ろした野太刀をパリイし、キリトとスイッチする

キリト「ハアアツ！」

キリトのソードスキルがボスの腹に叩き込まれる。すかさずキリトはアスナとスイッチする。アスナは短く息を吐き、ソードスキルを放つ。だが、まだ終わらない、アスナのソードスキルが放たれたのと同時にユウキがソードスキルを叩き込む。

それを見ながら、ようやく硬直の解けた俺はキリトとアイコンタクトしながらボスにラストアタックを仕掛けるべく走る。

カクヤ「はアアアアアアっ!!」

キリト「ツオオオオ！」

カクヤに遅れるようにしてキリトが剣を手にラストアタックを仕掛ける。カクヤは、2連撃のソードスキルをボスの腕、腹に斬り込む。スイツチし、同じようにキリトも2連撃ソードスキルをボスの腹に斬りこんだ……

キリト「はあ……はあ……」

キリトはソードスキルを放った体制のまままで荒い息を吐きながら立っていた。そこ

へ

カクヤ「よ、お疲れさん」

その声をかけられたからだろうか、尻もちをつくようにして座り込み、

キリト「ああ、カクヤもお疲れさま……」

カクヤ「おう」

周りのみんなはボスを討伐できたことに歓喜している。

さて、ここからもうひと踏ん張りかなあ……

カクヤはそう考えながら唯一喜んでいない者達へ視線を向ける。

キバオウ「なんでや!!」

キバオウの一声に皆が視線を向ける。

キバオウ「……なんで、なんでディアベルはんが死ななあかんのや! おかしいやろ!」
その一言で周りは静まりかえり

カクヤ「はあ? あんた何言ってるんだ?」

今度こそ静まり返った……

キバオウ「何言うとするか……やと?」

カクヤ「うん、何言ってるのあんた? てか、誰だっけ」

キバオウ「キバオウや! 忘れんな!」

カクヤ「あ、そ。で? なんだっけ?」

キバオウ「……ふざけとんのか?」

異様な空気に皆が言葉を発せずに居る中、

ただ1人だけ、カクヤは話を続ける

なんの違和感も感じないかのよう

キバオウ「せやから、おかしいやろ! なんでディアベルはんが死ななあかんのや?」

カクヤ「なんでもクソもないじゃん、1人で突っ込んだからだよな。」

キバオウ「……」

カクヤ「それに、俺は止めたぞ？」「下がれ」ってな」

キバオウ「……お、お前は知ってたんやろ！ボスの武器がβテストと違うってことを！」

カクヤ「……」

キバオウ「やないと、ディアベルはんを止めることなんで出来へんもんな！」

そうだそうだ!!

よく考えたらそうだ、なんであんなに的確な指示が出来たんだ……おかしいぞ……

だ、騙してたのか！

カクヤ「はあ、いくら人が目の前で死んだからって冷静な思考判断能力まで無くすな

よ」

この一言でまた一瞬静まりかえるが、堰を切ったかのように暴言罵倒の嵐が続いた。

カクヤ「まあ、みんなの思う通り俺はβテストだ」

この状況で、あつさりど、ここにいる人達を敵に回す発言をした

7話【ビーター（裏切り者）】

カクヤ「もう一度言うが、みんなの言う通り俺はβテスターだけど」

この場にいるほぼ全員を、敵にまわす発言をあつきりとしてのけたカクヤは、硬直する皆を見て嘲笑うかのように言葉を続ける。

カクヤ「お前らが言った通り、俺はβテスターだ。ボスの武器が変わったのは知らなかったがな。ま、有りうる…とは予想できるから警戒してたのだがなあ、やっぱディアベル馬鹿だわ。」

クハハ と、笑いを堪えきれない様子で話していく。

キバオウ「何が可笑しいんや！人が1人死んどるんやぞ！」

カクヤ「クツハハ……いや、…わりい……腹ねじキレそうだわ…ハハハ！」

キバオウ「ツ!?!……狂つとる……」

カクヤ「……ああ、それがなにか？」

キバオウ「……この人でなしが……」

カクヤ「……話はそれだけか？俺は早く2層目の転移門のアクティベートしたいんだけど？」

カクヤは心底うんざりしてるような表情を浮かべ、気だるそうにたつて話す。そんな彼を見て周囲は哑然として静まり返った

カクヤ「……」

（もういいみたいだな、あー、嫌な役回りだぜ、つたく……）

カクヤ「そんじや、俺行くわー。多分また会うぞー。ばいばーい」

ニヤニヤと、相手に嫌悪感を湧かせるような笑みを浮かべて上層階へ続く階段へと体を向ける。

ユウキ、キリト、アスナ、エギル等、自分が何をしたいかを察してくれているであろう人達。その人達にむけて先程までと違う、純粋な笑みを浮かべ、その場を立ち去る。

この話が広がって、みんなが俺を避けるだろう。誰も俺を助けないだろう……
さあ、孤独な戦いとやらがここから始まる……

上層階へと続く階段

ユウキはカクヤのことを追ってきた

ユウキ「……ねえ、カクヤはあれでよかったの……？」

カクヤ「あー……まあ、よかったもクソもないが、あれが正解なんじゃね？」

ユウキは、少し悲しそうに言うカクヤにかける言葉を失ってしまった。

カクヤ「……きつと、『良かったか』『良くなかった』かで言えばあの結果は良くないんだらうな……」

ユウキ「……ッ！」

カクヤ「けど、あの状況なら俺『だけ』ならまだしも、キリトもバレてただらうしなあ。やっぱりあれが最善なんだらうよ」

肩をすくめながら言う

ユウキ「……ねえ、これからカクヤはどうするの？」

カクヤ「んー？まあ、今まで通り1人で戦うってところかね」

ユウキ「……そつか……ならボクも『ダメだっつーの』……え？」

カクヤは頭をポリポリと掻きながらダルそうに説明する

カクヤ「あのなあ、俺はこのゲームに参加してるプレイヤーの、ほぼ全員を敵に回したも同然な状況にいる訳なんだぞ」

ユウキ「……うん、そうだね」

カクヤ「うん」

ユウキ「うん」

カクヤ「うん？」

ユウキ「？」

カクヤ「えと、ユウキさん？理解してますか？」

ユウキ「え、何を？」

カクヤは頭を抱えて座り込む

カクヤ「…はあ…」

ユウキ「どうしたの？」

『全く理解できない』

そういう顔をしながらかてんと首をかしげるユウキ

そんなユウキを見てカクヤはさらに深い溜息を吐く

「……………いや、可愛いんだけどね？……………」

カクヤ「……………だあー、めんどくせえ…」

カクヤはガジガジと頭を乱暴に掻きながら1から説明する。

カクヤ「いいか？俺はさっきの発言でこのゲームに参加してるほぼ全員のプレイヤーを敵に回してるも同然なんだぞ？」

ユウキ「うん、それは分かってる」

カクヤ「……………なら分かるだろ…」

はあー……、と再度深い溜息を吐き、優しい笑みを浮かべながら続ける。

カクヤ「誰かが俺と一緒に居るだけでそいつが狙われちまうだろ？」

ユウキ「……うん、そうだね……」

ユウキは、悲しそうな表情を浮かべながら同意する。

そんなユウキを見てカクヤは、自分より低い位置にあるユウキの頭を撫でながら

カクヤ「だから誰も一緒にいてこさせねえし、ついて行けねえよ。」

ユウキ「……でもそれじゃ「けどな」……？」

少し、ほんの少しだけ悲しそうな笑みを浮かべながら

カクヤはしつかり宣言する。

カクヤ「ユウキとの約束もあるし、困ったことがあつたら俺を呼べばいい」

ユウキ「え？」

カクヤ「別に呼ばれたら向かわねえとは言わねえしな。まあ、それも信じるに値する

やつだけだが」

カクヤはフツと笑い

カクヤ「ま、そーゆー事だ、またなーユウキ」

背を向け、階段を登りながらヒラヒラと手を振る。

……カクヤの背中が見えなくなつてから
ユウキ「うん、またね！」

元気にそう答えながらカクヤとは反対に、ユウキは階段を降りていく

第8話 【ユニークスキル】

……………第1層クリア後

攻略組は怒涛の勢いで階層をクリアしていった。

次々と階層をクリアすることが出来たのは

キリトを初めとした元ベータテスターによる情報提供のお陰である。

カクヤが他のプレイヤーの敵意を集め、去った後、

キリトは自分も元ベータテスターであることを明かしたが、

カクヤと違って、敵意を向けられることはなかった。

しかし、元テスターであるという理由で多少孤立してしまったようだ。（キリト本人

は特に気にしてはいないが）

カクヤ「しっかし…めんどくせえな……」

ガジガジと頭をかきながら呟く。

ユウキ「うん？どうしたの急に」

カクヤ「…お前はこれをめんどくさいとは思わんのか……」

ユウキ「……そんなこと言う暇あるならどんどん倒そうよ……」

カクヤ（めんどくさいのは否定しないのか……）

今、カクヤ達はモンスターに囲まれている。

こんな状況になった原因はカクヤ自身にあるのだが……

【それ】が届いたのは数時間前……

宿でアイテム整理、スキルの確認を行っていた時のこと。

ピピツという聞きなれた通知音がした。

カクヤ「あ？」

右上に見えるメール通知のアイコンに首をかしげながら

ウインドウを開く。

カクヤ「……こいつは……」

内容を詳しく見ていると、またもやメールの通知が聞こえる

カクヤ「おっ？」（今度は誰からだ？ま、送ってくる相手なんてほとんど決まってるが）

メールの差出人はユウキだった。

ユウキ『今日のお昼過ぎに、クエストを手伝ってくれないかな？』

カクヤ『他に誰か居たりしないのなら行くわー』

よし、とりあえずこれでいいだ r（ピピツ

……返信早くないか……？

俺が言うのもあれだが……

ユウキ『うん、カクヤとボクだけだよ!』

カクヤ『あいよー、どんなクエストなんだー?』

ユウキ『討伐系のクエストだよ』

ふむ……討伐系か……丁度いいな。

カクヤ『りよーかい、ほんじゃまた後でなー』

ユウキ『伝え忘れるところだった……集合場所は転移門前だからね』

カクヤ『はいよー』

つと、これでよしつと……昼まで時間潰すか

—— 転移門前 ——

カクヤ「……くあ……」

あー、ねみい……すつつつ上げえねみい……

ユウキ「おつまませー!!」

カクヤ「おー……」

ユウキ「……どうしたの?」

ユウキは心配そうにカクヤを見る

カクヤ「いんや、ちよっち眠いだけだ」

ユウキ「…寝といた方がいいんじゃないの？」

カクヤ「だいじょーぶだいじょーぶ、戦闘になるまでには眠くなくなるから」

ユウキ「そう？…あ、クエストの説明をしておくね」

カクヤ「いや、どーせ狩りまくるだけだしいいよ別に」

ユウキ「むっ……」

カクヤ（なぜ睨む……）

とりあえず移動しようぜー、と言うカクヤに

ユウキは少し睨みながら同意する。

クエストの内容はありきたりなものだった。

村の畑を食い荒らすモンスターを退治しろとの事

（カクヤは結局クエスト内容を聞かされた）

順調にやって1時間ほどで終わったクエストだったのだが…

クエストが終わり、報酬を山分けした後が問題だった。

カクヤ「あ、そうだ」

ユウキ「どうしたの？」

カクヤ「いや、実はな…」

カクヤは何を思いついたか言わないまま、クエストに誘われる前のメールの話をした。

ユウキ「へえー、そんなのが届いたんだ」

カクヤ「ああ、まあ、俺一人で使うつてもアレだし

ユウキもどうかなって」

ユウキ「うーん……ボクも興味あるから使ってみたいな！」

カクヤ「うっし、決まりだな」

そう言つてカクヤが取り出したアイテムは紫色をした液体の入った瓶

このアイテムは使用すると一定時間、特定のモンスターが湧き続けるという特殊なアイテムだ

このアイテムが届いたメールにはこう書いてあった

???『このスキルをお前に託す。このアイテムはそのスキルを受け取るための物だ……使用する時の注意は読んでおけよ?このスキルを使いこなせると、俺はお前を信じてる。』

差出人は不明、どんなスキルかも分からない

けれど、託されたのなら…受け取り自分の力の糧にする義務がある。と、思う……

カクヤ「だからま、いっちょやってやりますか！」

——そして冒頭へ至る……——

ユウキ「何が【いつちよやってやりますか!】だよ!

ロクでもないじゃないか!」

カクヤ「うっせー! 同意したのはユウキもだろ!?

いいから斬れ斬れ!」

ギヤーギヤー騒ぎながらもちやくちやくとモンスターを屠る2人。

仲がいいご様子で

カ・ユ「うっさい!」

はい……

3時間ほど経ち、ようやく最後のモンスターを斬り伏せた。

カクヤ「ぜえ……ぜえ……」

ユウキ「はあ……はあ……」

2人とも膝を着いており、肩が上下するほど荒い呼吸を繰り返す。

カクヤ「ぜえ……ぜえ……つと、スキルはつと」

ウインドウを開いてスキルをチェックする。

ピシツという効果音がピツタリな様子でカクヤが固まる

ユウキ「はあ……はあ……ど、どうしたの?」

カクヤはまだ固まっている。

ユウキ「…カクヤ？」

ユウキはカクヤの瞳を覗き込むように上目遣いで見つめる
カクヤ「ぬうア!？」ザザザ!

飛び退くように後ずさり、固まっていた理由を話す。

カクヤ「……ここ、これは最高だわ……」

ユウキ「……ど、どんなスキルだったの!？」ゴクリ

ユウキは思わず生唾を飲み込んだ

カクヤ「………形状変化だと」

ユウキ「………形状…変化？」

カクヤ「…おう、形状変化」

ユウキ「…形状変化…何が最高なの？」

コテンと首を傾げるユウキ、可愛いなお前って違う違うそっちじゃない
カクヤはスキルの説明欄を読み上げる

スキル【形状変化】

〔武器に使用可能〕

・片手剣 ⇄ 両手剣 ⇄ 曲刀 ⇄ 刀 ⇄ 短刀

・片手斧 ⇄ 両手斧 ⇄ 片手棍

上記の2種類についてはそれぞれに変化可能

例外として、槍は「形状変化」は使用不可

使用時について

・体力（HP）を50（固定値）消費する。

・クールタイムなどは存在しないため、形状変化後もすぐに形状変化を行える。

・このスキルは武器スキルを装備せずとも使用可能（このスキルが武器スキルの代わりを担っている為）

・武器スキルの練度もあげることが可能（ただし通常の武器スキルの練度より上がりづらくなっている）

カクヤ「……だと」

ユウキ「ちよ、ちよつと待って！」

カクヤ「どした？」

ユウキ「使用時にHPを消費するって言ったよね！そんなのダメだよ！」

カクヤ「……」

ユウキ「ここじゃHPが尽きたら死んじゃうんだよ!？」

カクヤ「……あー、ほら、ハイリスクハイリターンって言うじゃん」
ユウキ「でも！」

カクヤ「んじゃあ、ユウキはなんで戦ったんだ？」

ユウキ「……っ！」

カクヤ「そーいうことだよ」

ユウキ「……」

俯いてしまったユウキに優しく微笑む

カクヤ「だいじょーぶだって、俺は死なねえよ」

そう言つて彼は気楽に笑う

確証なんてない、この世に絶対はありはしない

特にHPが尽きたら死んでしまうこの世界では……

ユウキ「……うん、わかった！信じるからね！」

そんなことは分かつてる、だからこそ

ユウキ「はー、疲れたー…早く街に帰ろー」

死ねない理由ぐらいあつた方がいいだろ